

氏 名 金 炳辰

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大乙第230号

学位授与の日付 平成26年3月20日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 革命的サンディカリスト大杉栄
—「生の創造」に基づいた革命展望—

論文審査委員 主 査 教授 松田 利彦
教授 劉 建輝
教授 稲賀 繁美
偉倫特任教授 鈴木 貞美 清華大学
教授 荻野 富士夫 小樽商科大学

論文内容の要旨
Summary of thesis contents

本論文は、社会主義者・無政府主義者として一般的に知られてきたものの、その思想的内実が精査されてきたとは言い難い大杉栄という人物を、革命的サンジカリストとして再照射したものである。とりわけ、大杉が求めた革命戦略を分析し、その革新的な理念としての「生の創造」という思想、および、その背景となる世界観を究明した。

第一章では、大杉に多大な影響を与える幸徳秋水の社会主義に関する言説を再検討し、幸徳の唱えた社会主義が、たしかに社会進化論的な性格が強かったものの、その内実は従来考えられていたものとは異なることを考察した。

明治期に、社会主義は社会進化の原動力である「競争」を取り除く「平等」の思想として、自然法則に反する理論であると見られる傾向があった。幸徳はそれに対して、「競争」という概念の再考を促して、人類は「腕力の競争」→「智謀や技術の競争」→「名誉の競争」→「道徳の競争」のように「競争」の原理を変えてきたと述べ、真の「競争」である「道徳の競争」が可能になるのは社会主義社会であると論じた。また、幸徳は進化の原動力として「協同」の概念もとりあげ、「協同」も自然法則、進化の原理の中で把握する。それにはエンゲルスを經由したマルクス主義の理解が裏付けになっていた。

幸徳の社会主義は、連続的な漸進主義の性格を持ち、自然進化と社会進化を同一線上で考えるなど社会進化論的な性格がつよい。そのようにして、「革命」も「進化的過程」の中で捉えるなど、自然進化と社会の進化を一元的に考える「科学的社会主義」が出来上がった。この立場は、彼がアナキズムに傾倒した後にも堅持されたことが確認できる。

第二章では、大杉栄の進化論に基づいた社会主義の解釈と、その変化の過程を検討し、大正期を通して展開していく彼独自の革命的サンジカリズムの根拠を確認した。

大杉は、丘浅次郎の『進化論講和』に啓発され、幸徳の「進化論的社会主義」を經由して社会主義者になった。社会主義を進化論にアナロジーする大杉の態度は、進化論における新たな発見と共に、彼自身の社会主義論にも変化をもたらすようになった。突然変異説によって非連続的な革命の可能性を確認し、やがてベルクソンの『創造的進化論』に出合い、革命の主体であるべき個々の労働者の「生」に注目する。そこでの「生」とは、それ自体拡張するもの、充実を求めるもの、力として発現するもので、特定の目標を想定せず、偶然性を含むが、常に向上を求めるものであった。

大杉は、これによって幸徳が戦術として導入した「直接行動論」に、理論的な根拠を確保できた。また歴史唯物論に立脚するマルクス主義に対する批判とともに、学者の理論であるアナキズムとも一定の距離を置くようになる。大杉は、労働者たちの自律的な労働運動の参加に多大な意味を与える、異色を放つ社会主義思想を展開した。

第三章では、大杉栄の「政治的な理想」を究明するため、議会制民主主義や「科学的社会主義」に対する批判の論拠を探り、「自治の連合制度」としての新たな政治的領域の可能性や、自己獲得運動として実践に基づいた「新社会主義」であるサンジカリズム運動の展望を確認した。

大杉が唱えるサンジカリズムは、その権力の発生機関として最も有力な産業現場におけ

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

る「権力闘争」をその基底に据えていた。この点において彼の視座は一定の「政治的」な立場を取っている。「政治的」とは、彼が資本家権力に挑戦したという意味のみならず、その闘争の本質的な部分が権力闘争であったという点である。彼が行った権力闘争は議会を中心とする、いわゆる「政治の場」ではなく、「労働者の作業場」という空間で展開されたのである。大杉が「自己獲得運動」や「人格運動」と呼んだこの方法を制度的な面で積極的に評価するなら、「産業自治論」や「労働者自主管理」といった形が想定される。

また、大杉は議会制民主主義における「代議制」に問題点を見出して、被選挙権者と選挙権者との間隔がより密着できる「代議制」を提案した。なお、様々な目的による多様な会議や協会が網状に結び付いた構造は中央集権的な権力機構とは相容れないものであった。その中で、彼は新たな社会組織の根幹を、生産機構に関わる労働組合に求めていく。労働組合は労働者たちが自らの能力を伸長させる場として期待された。また彼は労働組合に闘争機構のみならず、新しい体制内で機能できる新制度としての意味を持たせていた。

大杉は経済的領域である労働組合を重視したが、経済決定論的な立場ではなかった。むしろ、その決定論的な側面ゆえに既存の「科学的社会主義」に反発を抱いたのである。彼にとって社会主義への移行は、労働者が実行の中で社会の全構造を理解し、諸種の社会的傾向と内的な憧憬を合致させる自発的な意志による運動によるものでなければならなかった。その意味で、大杉が理想としたサンジカリズム運動とは、新時代の建設とともに「自己獲得運動」なのであった。

第四章では、労働運動高揚期に、革命的サンジカリズムが実際に労働運動を結合して行く様相を、大杉栄の実践活動に探った。その過程で、大杉が堅持していた思想的な特徴と独自性を究明できた。

1920年代初め、日本の労働運動の主流は労資協調的な労働組合であった。だが、経済構造の変化やロシア革命の消息、大杉栄グループの宣伝活動は、これらの組合を大きく揺さぶった。また、明治以来の革命的社会主義という立場を堅持してきた他の社会主義者たちも、革命的な伝統を労働者たちの直接行動に求めた。しかし、ロシア革命に対する観点の違いから亀裂が生じ、「労働組合全国総連合」などの協同闘争は破綻になった。表面的には「自由連合論」対「合同論」の対立が理由だったが、労働運動における「主体」と「目標」の問題が絡んでいた。

大杉が「自由連合論」を支持したのも、これが労働者の経験や憧憬に基づいて、彼等の言語を以って表現された点であった。彼は自身を含む知識人の役割を、労働者の中から現われる先進分子を励まし、その「気分」を理論にまで誘導するものに限定した。知識人や職業的革命家による他律的、代理的な闘争による革命に、常に疑いを持っていた。同志の一部が「アナーキスト」だけの組織で闘争を主張した時に、これに同意しなかったのもこの理由からであった。大杉が「労働運動は労働者の自己獲得運動、自主自治的生活獲得運動である」といったのはまさしくこのことを指す。

本論文の意義は、第一には、大杉栄が唱えた「生の創造」としての革命的サンジカリズムの革命展望を確認し、従来検討されてこなかった彼の思想と活動の内部を究明したことである。幸徳が説いた進化論と社会主義とを結合する理論は、大杉に大きな影響を与えた。しかし、二〇世紀初頭の新たな進化論の登場や、それに触発されたベルクソンの『創造的

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

進化』にヒントを得た大杉は、決定論的「科学的社会主義」と決別にいたったことを新たに証明できた。これは、アナーキズム対マルクス主義といった図式を無反省の内に踏襲した結果ではなく、同時代の哲学や科学思想を積極的に取り入れ、世界的な革命展望の中で日本の労働運動の歩みと軌を共にした模索であった。第二の意義は、日本の初期社会主義の成立における概念の編成の一例を実証し、その実践の過程を解明したことである。

Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は、大正期日本の思想家・社会運動家として知られる大杉栄（1885～1923年）を「革命的サンジカリスト」として再評価しようという試みである。大杉の革命戦略とその核心理念たる「生の創造」を中心に、その思想の淵源と形成、展開過程を論じている。

「序論」では、大杉の思想が必ずしもアナキズム一般に還元できないと指摘し、大杉の活動した時期と同時代の世界的な思潮を参照しつつ、その思想と活動を分析することが必要だとしている。

第一章では、幸徳秋水の社会主義受容と進化論の関係を考察している。大杉が当時の若手社会主義者の中では幸徳から最も多大な影響を受けたとされているためである。当時、社会主義は「競争」を排除した思想と見なされていたが、幸徳は、人類は「腕力の競争」から出発し最終的に「道德の競争」に至るというように「競争」の様相を変えてきたと述べ、社会主義こそが真の競争たる「道德の競争」の舞台を提供するものだと反論した。倫理性と「競争」を結合させたかかる主張は、米国の社会主義者リチャード・イリーの影響を受けたものだった。次に、幸徳の「合同」「協同」概念が検討され、幸徳がこれらを進化の自然法則に則して把握したのは、同時代の第二インターナショナルのマルクス主義運動の動きに影響を受けたためだとされている。

第二章では、大杉が、幸徳秋水の影響から進化論を社会主義への経路と考えつつ、大逆事件（1910年）以後、独自の革命論を展開するようになったことが論じられる。すなわち、大杉は蓄積された「力」の爆発による急進的な革命を考えたが、この背景としてはド・フリースやワイスマンらによる進化論をめぐる議論の変化を大杉なりに消化していたことが指摘される。これは漸進主義的色彩を残していた幸徳と異なる点だった。さらに、『近代思想』誌上で大杉が展開した「生の拡充」の思想において鍵概念となっているのは「本能」であったが、それは人間の「生」を変化と創造に導く力の根源と位置づけられていた。大杉は、ベルクソンの進化論哲学を革命論に読み替え、ジャン＝マリ・ギュイヨールの影響によって個人の能動的な生の拡充が他人に広がっていくと考えた。そして大杉は、このような革命の担い手として労働者を措定し、労働者自身の「生」と「自我」の創造的進化としての社会運動たるサンジカリズムに到達する。

第三章は、大杉がどのように社会主義革命への道筋を想定していたかを探ろうとする。大杉は特定の目的に即して多様な分野ごとに代表を選出する、いわば機能的な参加民主主義を志向した。同時代のフランスや英米では、労働組合運動は雇傭主に対する運動から国家権力に疑問を突きつける政治的運動へと変化しつつあったが、大杉はこれらサンジカリズムと呼ばれる運動に敏感に反応しその意義を認めている。他方で、大杉の思想は、自然法則に基づき社会主義への移行が必然的に進行すると考える「科学的社会主義」に対する批判も含意していた。大杉は、労働者が賃上げや生活改善といった能動的な実践を通じて資本主義を変革しなければならないと述べた。大杉の考える革命は、古い社会の胎内から新しい社会への変化が労働者階級の組織という形で現れ、既存の制度を駆逐するという方法を想定していた。

第四章は、第一次世界大戦後、革命的サンジカリズムが労働運動に浸透していく様相を、

(Separate Form 3)

大杉の実践活動から探る。大杉を中心とする北風会の活動は、大戦後における労働運動の高揚期、労働争議・ストライキの現場で「演説会貫い」と称する宣伝活動を展開し、労働者に討議を通じて力量を養わせ、日本の労働運動の戦闘化や労使協調主義への疑問喚起などの面で大きな功績を残した。労働組合にもとづく急進的社会変革運動の傾向は大杉ばかりでなく山川均にも共通していたが、「アナ・ボル論争」によって社会主義陣営の内部分裂が進む。大杉のロシア革命批判や日本労働組合総連合(1922年)の性格をめぐる議論は、労働者の「自主自治の感情」を重視するものであり、変革運動において労働者の参加が何よりも重要だとする点で一貫していた。

「結論」では、本論文の内容が再度まとめられた上で、今後の課題として、思想家としての大杉の全貌を明らかにすること、および国際的な共感が大杉の理論と活動に寄せられていたことを具体的に説明することをあげている。なお、後者の課題に関わるものとして、補論が付されており、大杉が日本統治期朝鮮において、西洋アナキズムを伝える媒体となったばかりでなく、朝鮮社会主義者の世界認識に影響を与えたと論じている。

本論文は以下のような意義を持つ。

第一に、大杉栄個人の思想研究にとどまらず、初期社会主義者、さらには西欧の進化論・マルクス主義の潮流まで視野に入れ、その思想的連関性にまで踏みこんで説明した点である。これによって、初期社会主義者のマルクス主義理解の不徹底さとこれまで評価されていたものが、むしろ同時代の世界的な思想潮流を反映するものであることを明らかにした。特に大杉栄が幸徳秋水から受け継いだ思想とギュイヨーおよびベルクソン哲学、すなわちフランス・ヴィタリズムの受容の関係にもはじめて分け入り説明した。従来の研究に見られなかった新たな視角から日本の初期社会主義に光を当てたことは高く評価されてよい。第二に、大杉の思想と運動論に明確かつ論理的な解釈を与えることに成功している。労働者による労働運動への自律的な参加に大きな意義を見出す大杉の異色のサンジカリズムを、本論文は、議会や行政ではなく産業現場を権力発生場としてとらえたという点ですぐれて政治的性格をもった議論だったと見なす。このような本論文の議論が今後の大杉研究に一石を投じることは疑いない。

第三に、本論文は、萌芽的ではあるが、日本のみならず東アジアにおける社会主義受容という問題への発展可能性を示していることも付記しておきたい。

反面、本論文に問題点が残されていないわけではない。まず、先行研究に対して執筆者自身の議論をやや性急に対置しようとする傾向が見受けられ、先行研究の提示してきた課題や可能性をより丁寧にすくい上げるべきであるとの指摘がなされた。また、「生の創造」に基づく大杉の論理をロジカルに追究するあまり、大杉の人間像についての説明は必ずしも十分ではなく、今後の課題として残されている。さらに、つとめて理性的に大杉の思想を分析しようとする姿勢は一貫しているが、権力ネットワーク論的な現代韓国のマルクス主義理解に基づいた価値判断が必ずしも払拭されていない。ただし、こうした問題点の多くは、大杉の革命思想を「生の拡充」という根本理念から切開するという点に問題設定を限定することによってはじめてなしえた成果と裏腹の関係で生じたものであり、またそれを執筆者自身がよく自覚しており、今後、研究の視野を拡大することによって克服されると審査委員一同は判断した。

以上を総合的に検討した結果、本論文を、学位を授与するに値すると、審査委員全員一

(Separate Form 3)

致で判定した。